

基本計画書

基本計画									
事項	記入欄						備考		
計画の区分	研究科の専攻の設置								
フリガナ設置者	コクリツダイガクホウジン コウチダイガク 国立大学法人 高知大学								
フリガナ大学の名称	コウチダイガク ダイガクイン 高知大学 大学院 (Graduate School, Kochi University)								
大学本部の位置	高知県高知市曙町二丁目5番1号								
大学の目的	<p>高知大学は、「地域を支え地域を変えることができる大学」を目指し、地域連携プラットフォームの中核的存在として持続可能な地域社会の発展に寄与するとともに、地域にありながら世界と対話・交流・協働できる大学としての輝きを放ち、人類社会と地球の豊かな未来を切り拓くための教育研究活動を展開する。</p> <p>そのため、以下の基本目標を掲げる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教育 社会的ニーズに対応した教育改革を通じて教育の充実を図るとともに、学修成果の可視化や教学IRの推進を通じ、入学前から卒業後まで一貫した質保証の中で教育を実施する。また、多様な人々が協働して学ぶことのできるインクルーシブな教育環境の構築と世の中に働きかけることのできる自律的な能力の向上を通じて、地域社会・国際社会の発展に貢献できる人材を育成する。 2. 研究 海洋、生命、フィールドサイエンスを中心とした研究の強みを生かして、国際通用性と地域貢献性を兼ね備えた知と価値の創造を推進するとともに、世界的視野をもつ科学者の育成を図る。また、研究活動を通じてイノベーション・マインドやアントレプレナーシップの醸成に取り組み、知の創造を価値の創造へと転換するイノベーションエコシステムを構築する。 3. 地域連携（地域協働） 高知県における「地域連携プラットフォーム」の中核を担い、地域課題への対応・解決、社会人等を対象としたリカレント教育の充実、地域のニーズに対応した教育研究組織の改革により、地域連携をより一層進化させる。また、高知大学にかかわるあらゆる“高知大学人”を巻き込んだ人的なネットワークを形成することを通じて、地域貢献をより充実したものにする。 4. グローバル化（国際化） 教育・研究の場を広く地域そして世界に開くとともに、教育プログラムの国際化や学生の海外派遣の充実を通じて、キャンパスの国際化と国際性を涵養する人材の育成を図る。また、留学生の地域内定着を支援しながら地域における国際化の未来を切り拓くとともに、地域の視点を兼ね備えた国際人材を育成する。 								
新設学部等の目的	<p>本専攻は、地域の多様な主体とともに地域課題の解決策を創ることを「共創」と定義し、地域社会のスポーツ文化・芸術文化の領域において「共創」を行うための教育研究を行うことを通じて、持続可能な地域社会の発展に寄与することを目的とする。人材養成では、スポーツ・芸術スポーツや芸術の優れた知識・技能を有し、エビデンスベースドな研究成果を還元することを通じて、文化振興などの課題を解決することができる高度な専門職業人を養成する。</p>								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	【基礎となる学部】 なし 14条特例の実施
	総合人間自然科学研究科 スポーツ・芸術文化共創専攻 Sports and Arts Initiatives Codevelopment Program	年	6	年次 人 —	12	修士（学術） Master of Arts	年月 第年次 令和6年4月 第1年次	高知県高知市曙町二丁目5番1号	
	計	—	6	—	12				

同一設置者内における 変更状況 (定員の移行、名称の 変更等)		医学部[収容定員変更] (令和5年9月設置計画書提出) 医学科 (15) ※令和6年度を期限とする収容定員増							
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
		講義	演習	実験・実習	計				
	総合人間自然科学研究科 スポーツ・芸術文化共創専攻	42科目	20科目	0科目	62科目	34単位			
教員 組織 の 概 要	学部等の名称		専任教員等					兼任 教員等	
	新設分	総合人間自然科学研究科 スポーツ・芸術文化共創専攻	人	人	人	人	人	人	人
		計	8 (8)	9 (9)	2 (2)	1 (1)	20 (20)	0 (0)	9 (9)
	既設分	総合人間自然科学研究科修士課程 人文社会科学専攻	24 (24)	21 (21)	5 (5)	0 (0)	50 (50)	0 (0)	1 (1)
		総合人間自然科学研究科修士課程 理工学専攻	39 (39)	20 (20)	15 (15)	7 (7)	81 (81)	0 (0)	8 (8)
		総合人間自然科学研究科修士課程 医科学専攻	46 (46)	18 (18)	18 (18)	51 (51)	133 (133)	0 (0)	15 (15)
		総合人間自然科学研究科修士課程 看護学専攻	6 (6)	7 (7)	6 (6)	4 (4)	23 (23)	0 (0)	15 (15)
		総合人間自然科学研究科修士課程 農林海洋科学専攻	39 (39)	23 (23)	9 (9)	4 (4)	75 (75)	0 (0)	4 (4)
		総合人間自然科学研究科修士課程 地域協働学専攻	9 (9)	6 (6)	3 (3)	0 (0)	18 (18)	0 (0)	0 (0)
		総合人間自然科学研究科専門職学位課程 教職実践高度化専攻	12 (12)	7 (7)	3 (4)	1 (1)	23 (24)	0 (0)	5 (5)
計	176 (175)	102 (102)	59 (60)	67 (67)	405 (404)	0 (0)	48 (48)		
合計		182 (182)	111 (111)	61 (62)	68 (68)	423 (424)	0 (0)	57 (57)	
教員 以外の 職員の 概要	職 種		専 任		兼 任		計		
	事 務 職 員		311 (311)		348 (348)		659 (659)		
	技 術 職 員		63 (63)		54 (54)		117 (117)		
	図 書 館 専 門 職 員		13 (13)		10 (10)		23 (23)		
	そ の 他 の 職 員		23 (23)		42 (42)		65 (65)		
計		410 (410)		454 (454)		864 (864)			

校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計			大学全体		
	校 舎 敷 地	451,584㎡	0㎡	0㎡	451,584㎡					
	運 動 場 用 地	65,901㎡	0㎡	0㎡	65,901㎡					
	小 計	517,485㎡	0㎡	0㎡	517,485㎡					
	そ の 他	1,573,787㎡	0㎡	0㎡	1,573,787㎡					
合 計	2,091,272㎡	0㎡	0㎡	2,091,272㎡						
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計			大学全体		
		130,323㎡ (130,323㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	130,323㎡ (130,323㎡)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設			大学全体		
	86室	135室	490室	10室 (補助職員0人)	5室 (補助職員2人)					
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称			室 数			大学全体		
		スポーツ・芸術文化共創専攻			20 室					
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	専攻単位での特定不能のため、 大学全体の数		
	スポーツ・芸術文化 共創専攻	705,450 [186,264] (705,450 [186,264])	34,280 [20,166] (34,280 [20,166])	11,781 [11,781] (11,781 [11,781])	2,483 (2,483)	4,823 (4,823)	0 (0)			
	計	705,450 [186,264] (705,450 [186,264])	34,280 [20,166] (34,280 [20,166])	11,781 [11,781] (11,781 [11,781])	2,483 (2,483)	4,823 (4,823)	0 (0)			
図 書 館		面 積		閲 覧 座 席 数		収 納 可 能 冊 数		大学全体		
		9,557㎡		988		793,833				
体 育 館		面 積		体 育 館 以 外 の ス ポ ー ツ 施 設 の 概 要				大学全体		
		4,794㎡		武道館、弓道場、テニスコート、プール等を有している						
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	国費による	
		教員1人当り研究費等	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円		
		共同研究費等	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円		
		図 書 購 入 費	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円		
		設 備 購 入 費	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円		
	学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
		— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			—							
大 学 の 名 称 高知大学										
学 部 等 の 名 称		修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所 在 地	平成28年度より 学生募集停止 (人文学部)
人文学部		年	人	年次 人	人		倍		高知県高知市曙町 二丁目5番1号	
人間文化学科		4	—	—	—	学士(文学)	—	平成15年度		
国際社会コミュニケーション学科		4	—	—	—	学士(学術)	—	平成15年度		
人文社会科学部				3年次			1.03		同上	
人文社会科学科		4	275	8	1116	学士(文学) 学士(学術) 学士(経済学)	1.03	平成28年度		
教育学部							1.04		同上	
学校教育教員養成課程		4	130	—	520	学士(教育)	1.04	平成15年度		
理学部									同上	
理学科		4	—	—	—	学士(理学)	—	平成19年度		
平成29年度より 学生募集停止 (理学部)										

既設大学等の状況	理工学科			3年次			1.01		同上		
	数学物理学科	4	55	2	224	学士(理学)	0.99	平成29年度			
	情報科学科	4	30	2	124	学士(理工学)	1.02	平成29年度			
	生物科学科	4	45	2	184	学士(理学)	1.00	平成29年度			
	化学生命理工学科	4	70	2	284	学士(理工学)	1.00	平成29年度			
	地球環境防災学科	4	40	2	164	学士(理工学)	1.03	平成29年度			
	医学部							0.99		高知県南国市岡豊	医学部医学科の入学定員のうち15名は、令和5年度までの臨時定員増
	医学科	6	110	2年次 5	685	学士(医学)	1.00	平成15年度		町小蓮	
	看護学科	4	60	3年次 10	260	学士(看護学)	0.99	平成15年度			
	農学部									高知県南国市物部	平成28年度より学生募集停止(農学部)
	農学科	4	—	—	—	学士(農学)	—	平成19年度		乙200	
	農林海洋科学部				3年次					同上	令和5年度より学生募集停止(農林海洋科学部)
	農林資源環境科学科	4	—	—	—	学士(農学)	—	平成28年度			
	農芸化学科	4	—	—	—	学士(農学)	—	平成28年度			
	海洋資源科学科	4	—	—	—	学士(海洋科学)	—	平成28年度			
	農林海洋科学部				3年次			1.02		同上	
	農林資源科学科	4	135	2	137	学士(農学)	1.02	令和5年度			
	海洋資源科学科	4	65	—	65	学士(海洋科学)	1.03	令和5年度			
	地域協働学部							1.05		高知県高知市曙町	
	地域協働学科	4	60	—	240	学士(地域協働学)	1.05	平成27年度		二丁目5番1号	
	総合人間自然科学研究科										
	人文社会科学専攻	2	8	—	16	修士(文学) 修士(学術) 修士(経済学)	1.06	平成20年度		同上	
	教育学専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	平成20年度		同上	令和4年度より学生募集停止(教育学専攻)
	理工学専攻	2	55	—	110	修士(理学) 修士(理工学)	1.18	令和2年度		同上	
	医科学専攻	2	15	—	30	修士(医科学) 修士(公衆衛生学)	0.80	平成20年度		高知県南国市岡豊	
	看護学専攻	2	12	—	24	修士(看護学)	1.00	平成20年度		町小蓮	
	農林海洋科学専攻	2	55	—	110	修士(農学) 修士(海洋科学)	1.04	令和2年度		同上	
地域協働学専攻	2	3	—	6	修士(地域協働学)	1.16	令和2年度		高知県高知市曙町		
教職実践高度化専攻	2	15	—	30	教職修士(専門職)	0.83	令和4年度		同上		
応用自然科学専攻	3	—	—	—	博士(理学) 博士(学術)	—	平成20年度		同上	令和4年度より学生募集停止(応用自然科学専攻)	
応用自然科学専攻	3	6	—	12	博士(理学) 博士(理工学)	0.91	令和4年度		同上		
医学専攻	4	30	—	120	博士(医学)	1.04	平成20年度		高知県南国市岡豊		
黒潮圏総合科学専攻	3	6	—	18	博士(学術)	0.94	平成20年度		町小蓮		

<p>附属施設の概要</p>	<p>名称：高知大学教育学部附属幼稚園 目的：幼児を保育し、適正な環境を与えて、その心身の発達を助長するとともに、高知大学教育学部における教育の理論及び方法の実証並びに学生の教育実習を行うことを目的とする。 所在地：高知県高知市小津町10-26 設置年月：昭和30年7月 規模等：敷地面積：7,847.23㎡ 延べ建物面積：1,007㎡</p> <p>名称：高知大学教育学部附属小学校 目的：心身の発達に応じて初等普通教育を施すとともに、高知大学教育学部における教育の理論及び方法の実証並びに学生の教育実習を行うことを目的とする。 所在地：高知県高知市小津町10-13 設置年月：昭和26年4月 規模等：敷地面積：21,777.41㎡ 延べ建物面積：7,273㎡</p> <p>名称：高知大学教育学部附属中学校 目的：小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、中等教育を施すとともに、高知大学教育学部における教育の理論及び方法の実証並びに学生の教育実習を行うことを目的とする。 所在地：高知県高知市小津町10-91 設置年月：昭和26年4月 規模等：敷地面積：25,503.94㎡ 延べ建物面積：6,510㎡</p> <p>名称：高知大学教育学部附属特別支援学校 目的：知的障害児に対して、小学校・中学校及び高等学校に準ずる教育を行い、併せて、その能力に応じて、社会的自立に必要な知識、技能、態度を養うとともに、高知大学教育学部における障害児教育の理論及び方法の実証並びに学生の教育実習を行うことを目的とする。 所在地：高知県高知市曙町二丁目5-3 設置年月：昭和45年4月 規模等：敷地面積：7,261.00㎡ 延べ建物面積：3,436㎡</p> <p>名称：高知大学理工学部附属水熱化学実験所 目的：主として高温、高圧の水が関与する物質の挙動について研究を行い、あわせて学生の実験実習に供することを目的とする。 所在地：高知市朝倉本町二丁目17-47 設置年月：昭和48年4月 規模等：敷地面積：404㎡ 延べ建物面積：1,542㎡</p> <p>名称：高知大学医学部附属病院 目的：診療を通じて、医学の教育及び研究を行うことを目的とする。 所在地：高知県南国市岡豊町小蓮185-1 設置年月：昭和56年4月（開設：昭和56年10月） 規模等：敷地面積：66,717.23㎡ 延べ建物面積：63,662㎡</p> <p>名称：高知大学農林海洋科学部附属暖地フィールドサイエンス教育研究センター 目的：フィールドサイエンスに関する実践的教育研究を推進するとともに、共同研究、人的交流等の促進を通して、地域社会及び国際社会に貢献することを目的とする。 所在地：高知県南国市物部乙200, 高知県香美市土佐山田町上穴内 設置年月：令和5年4月 規模等：敷地面積：1,458,220.72㎡ 延べ建物面積：7,202㎡</p>	
----------------	--	--

(別紙)

国立大学法人高知大学 設置計画に関わる組織の移行表

令和5年度

令和6年度

学部等の名称	入学定員	編入学定員	収容定員
高知大学			
人文社会科学部	275		1,116
人文社会科学科	275	3年次 8	
教育学部	130		520
学校教育教員養成課程	130	—	
理工学部	240		980
数学物理学科	55	3年次 2	
情報科学科	30	3年次 2	
生物科学科	45	3年次 2	
化学生命理工学科	70	3年次 2	
地球環境防災学科	40	3年次 2	
医学部	170		870
医学科	110	2年次 5	
看護学科	60	3年次 10	
農林海洋科学部	200	—	804
農林資源科学科	135	3年次 2	
海洋資源科学科	65	—	
地域協働学部	60	—	240
地域協働学科	60	—	
計	1,075	3年次 30 2年次 5	4,530

学部等の名称	入学定員	編入学定員	収容定員	変更の事由
高知大学				
人文社会科学部	275		1,116	
人文社会科学科	275	3年次 8		
教育学部	130		520	
学校教育教員養成課程	130	—		
理工学部	240		980	
数学物理学科	55	3年次 2		
情報科学科	30	3年次 2		
生物科学科	45	3年次 2		
化学生命理工学科	70	3年次 2		
地球環境防災学科	40	3年次 2		
医学部	170		870	
医学科	110	2年次 5		令和5年度までの時限措置である医学部医学科の入学定員増(15名)について、減じた上で改めて15名の入学定員を令和6年度まで増員するもの。
看護学科	60	3年次 10		
農林海洋科学部	200	—	804	
農林資源科学科	135	3年次 2		
海洋資源科学科	65	—		
地域協働学部	60	—	240	
地域協働学科	60	—		
計	1,075	3年次 30 2年次 5	4,530	

高知大学大学院			
総合人間自然科学研究科			
人文社会科学専攻(M)	8	—	16
理工学専攻(M)	55	—	110
医科学専攻(M)	15	—	30
看護学専攻(M)	12	—	24
農林海洋科学専攻(M)	55	—	110
地域協働学専攻(M)	3	—	6
教職実践高度化専攻(P)	15	—	30
応用自然科学専攻(D)	6	—	18
医学専攻(D)	30	—	120
黒潮圏総合科学専攻(D)	6	—	18
計	205	—	482
計	1,280	—	—

→

高知大学大学院			
総合人間自然科学研究科			
人文社会科学専攻(M)	8	—	16
理工学専攻(M)	55	—	110
医科学専攻(M)	15	—	30
看護学専攻(M)	12	—	24
農林海洋科学専攻(M)	55	—	110
地域協働学専攻(M)	3	—	6
<u>スポーツ・芸術文化共創専攻(M)</u>	<u>6</u>	—	<u>12</u> <u>専攻の設置（設置報告）</u>
教職実践高度化専攻(P)	15	—	30
応用自然科学専攻(D)	6	—	18
医学専攻(D)	30	—	120
黒潮圏総合科学専攻(D)	6	—	18
計	<u>211</u>	—	<u>494</u>
計	<u>1,286</u>	—	—

教育課程等の概要															
(大学院総合人間自然科学研究科 修士課程 スポーツ・芸術文化共創専攻)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
目共通研究科	現代スポーツ・芸術文化共創特論	1前	2			○			1	3		1		兼1	【オムニバス】
	小計（1科目）	—	2			—			1	3		1		兼1	
専攻共通科目	地域文化振興特論Ⅰ	1前	2			○			3					兼4	【オムニバス】・【共同（一部）】
	地域文化振興特論Ⅱ	1後	2			○			3					兼4	【オムニバス】・【共同（一部）】
	地域社会学特論Ⅰ	1前	2			○			1	1					【オムニバス】・【共同（一部）】
	地域社会学特論Ⅱ	1後	2			○								兼3	【オムニバス】・【共同（一部）】
	地域社会学特論Ⅲ	2前	2			○			1	2					【オムニバス】・【共同（一部）】
	地域DX実践特論	1前	2			○					1				
	地域統計分析特論	1後	2			○					1				
小計（7科目）	—	14			—			4	2	2				兼8	
専攻ゼミナール	スポーツ・芸術文化共創ゼミナールⅠ	1前	2				○		8	9	2	1			
	スポーツ・芸術文化共創ゼミナールⅡ	1後	2				○		8	9	2	1			
	スポーツ・芸術文化共創ゼミナールⅢ	2前	2				○		8	9	2	1			
	スポーツ・芸術文化共創ゼミナールⅣ	2後	2				○		8	9	2	1			
	小計（4科目）	—	8			—			8	9	2	1			
専攻選択科目	地域指導者特論（体育）	1後		2		○			1						
	スポーツ指導者特論Ⅰ	1前		2		○			1						
	スポーツ指導者特論Ⅱ	1後		2		○			1						
	スポーツ指導者特論演習	2通		4			○		1						
	スポーツ心理学特論Ⅰ	1前		2		○			1						
	スポーツ心理学特論Ⅱ	1後		2		○			1						
	スポーツ心理学特論演習	2通		4			○		1						
	健康スポーツ運動学特論Ⅰ	1前		2		○						1			
	健康スポーツ運動学特論Ⅱ	1後		2		○						1			
	健康スポーツ運動学特論演習	2通		4			○					1			
	体力医科学特論Ⅰ	1前		2		○				1					
	体力医科学特論Ⅱ	1後		2		○				1					
	体力医科学特論演習	2通		4			○			1					

学位又は称号	修士（学術）	学位又は学科の分野	社会学・社会福祉学関係
卒業・修了要件及び履修方法		授業期間等	
<p>○研究科共通科目 ・「現代スポーツ・芸術文化共創特論」の1科目2単位を必修。</p> <p>○専攻共通科目 ・「地域文化振興特論Ⅰ」、「地域文化振興特論Ⅱ」、「地域社会学特論Ⅰ」、「地域社会学特論Ⅱ」、「地域社会学特論Ⅲ」、「地域DX実践特論」、「地域統計分析特論」の7科目14単位を必修。</p> <p>○専攻ゼミナール科目 ・「スポーツ・芸術文化共創ゼミナールⅠ」、「スポーツ・芸術文化共創ゼミナールⅡ」、「スポーツ・芸術文化共創ゼミナールⅢ」、「スポーツ・芸術文化共創ゼミナールⅣ」の4科目8単位を必修。</p> <p>○専攻選択科目 ・10単位以上を修得。</p> <p>以上の要件を満たし、合計34単位以上の修了要件科目の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受け、修士論文の審査に合格すること。</p>		1学年の学期区分	2学期
		1学期の授業期間	15週
		1時限の授業の標準時間	90分

同一の種類及び分野の学位を授与している既設の専攻

別記様式第2号（その2の1）

（用紙 日本産業規格A4縦型）

教 育 課 程 等 の 概 要																
(大学院総合人間自然科学研究科 修士課程 地域協働学専攻)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専攻共通科目	地域協働教育演習	1前		2				○			1	1	1		兼6 【オムニバス】・【共同（一部）】※実習・集中 【共同】 【オムニバス】・【共同（一部）】 【オムニバス】・【共同（一部）】	
	地域ビジョン策定演習	1後		2				○			1	2				
	デザインシンキング演習	1後		2					○			1				
	地域社会学演習	1前		2				○			3	1	1			
	小計（4科目）	—		8				—			5	5	2			兼6
専攻ゼミナール科目	地域協働ゼミナールⅠ	1前	2					○			10	7	3			
	地域協働ゼミナールⅡ	1後	2					○			10	7	3			
	地域協働ゼミナールⅢ	2前	2					○			10	7	3			
	地域協働ゼミナールⅣ	2後	2					○			10	7	3			
	地域協働実践演習	1通	2					○			10	7	3			
	小計（5科目）	—	10					—			10	7	3			
専攻基盤科目	共生・生活・文化分野	ソーシャルキャピタル論特論	1前		2			○			1					
		男女共同参画特論	1前		2			○					1			
		地域福祉社会学特論	1後		2				○			1				
		比較地域社会学特論	1前		2				○			1				
		スポーツ社会学特論	1後		2				○				1			
		芸術文化学特論	1後		2				○			1				
	小計（6科目）	—		12				—			4	1	1			
	自治・行政分野	自治行財政論特論	1前		2				○			1				
		コミュニティデザイン論特論	1後		2				○				1			
		小計（2科目）	—		4				—			1	1			
	経済分野	地域産業論特論	1前		2				○				1			
		国際経済論特論	1前		2				○			1				
小計（2科目）		—		4				—			1	1				

授 業 科 目 の 概 要			
（高知大学 大学院総合人間自然科学研究科 修士課程 スポーツ・芸術文化共創専攻）			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科共通科目	現代スポーツ・芸術文化共創特論	<p>研究科共通科目である「現代スポーツ・芸術文化共創特論」では、はじめに本専攻が設置された社会的背景と目的、育成すべき人材と専攻の持つ社会的意義、さらに実現すべき内容と展開される教育・研究指導内容について学ぶ。次に本専攻のキーワードとなっている「文化」と「共創」に焦点をあて、その定義と意味を明確にする。その後、専攻生は分野専門科目を担当する教員からオムニバスで、スポーツ文化・芸術文化を構成する2分野（スポーツ・健康分野、芸術分野）における先端的の研究について学習する。</p> <p>（オムニバス方式 / 全15回） （16 幸 篤武/4回）（共同）</p> <p>第1回：「スポーツ・芸術文化共創専攻」を理解する 第2回：「スポーツ・芸術文化共創専攻」におけるキーワードを明確に理解する(1)「文化」 第3回：「スポーツ・芸術文化共創専攻」におけるキーワードを明確に理解する(2)「共創」 第4回：スポーツ・健康分野における先端的の研究を学ぶ(1)健康、体力増進 （20 神門 大輔/2回） 第5回：スポーツ・健康分野における先端的の研究を学ぶ(2)運動パフォーマンスと指導者の教示 第6回：スポーツ・健康分野における先端的の研究を学ぶ(3)運動パフォーマンスと動感意識 （1 小原 浄二/3回） 第7回：芸術分野における先端的の研究を学ぶ（音楽）(1)声の美しさ 第8回：芸術分野における先端的の研究を学ぶ（音楽）(2)発声メカニズムの理解 第9回：芸術分野における先端的の研究を学ぶ（音楽）(3)合唱活動 （11 大山 宮和瑚（美和子）/2回） 第10回：芸術分野における先端的の研究を学ぶ（音楽）(4)ストリートピアノの意義と効果 第11回：芸術分野における先端的の研究を学ぶ（音楽）(5)ピアノとアウトリーチ活動 （15 松島 朝秀/2回） 第12回：芸術分野における先端的の研究を学ぶ（美術）(1)文化財資料の科学分析 第13回：芸術分野における先端的の研究を学ぶ（美術）(2)美術と自然科学の共創 （25 中尾 泰斗/2回） 第14回：芸術分野における先端的の研究を学ぶ（美術）(3)美術史の構造と分析 第15回：芸術分野における先端的の研究を学ぶ（美術）(4)美術史研究の現在</p>	オムニバス

<p>専攻共通科目</p>	<p>地域文化振興特論 I</p>	<p>地域文化振興特論 I では、文化振興などの課題を解決することができる高度な専門職業人として求められるスポーツ・芸術を軸とした地域文化振興に関する専門知識の修得を目標としている。この授業では、地方自治体職員、地域スポーツハブを構想しているパートナー、文化芸術施設スタッフ、公益財団法人等の協働する外部機関の専門職業人にも積極的に関わっていただき、担当教員と共同して講義を行うものである。協働する外部機関の専門職業人を招いて、地域の文化振興における現状と課題を明確化しながら改善の方策をデザインする。</p> <p>(オムニバス方式 / 全15回) (7 矢野 宏光・4 前田 克治・3 土井原 崇浩・22 大崎 優/1回) (共同) 第1回：オリエンテーション (22 大崎 優/3回) 第2回：地域スポーツ振興の方向性 スポーツ行政 第3回：地域スポーツ振興の現状 スポーツ行政 第4回：地域スポーツ振興の課題 スポーツ行政 (7 矢野 宏光・26 武市 光徳/3回) (共同) 第5回：総合型地域スポーツクラブの理念 スポーツ現場 第6回：総合型地域スポーツクラブの現状 スポーツ現場 第7回：総合型地域スポーツクラブの課題 スポーツ現場 (4 前田 克治・27 大原 恵里子/3回) (共同) 第8回：地域における芸術文化振興の理念 芸術文化施設 (音楽) 第9回：地域における芸術文化振興の現状 芸術文化施設 (音楽) 第10回：地域における芸術文化振興の課題 芸術文化施設 (音楽) (3 土井原 崇浩・29 筒井 秀一/3回) (共同) 第11回：地域における芸術文化振興の理念 芸術文化施設 (美術) 第12回：地域における芸術文化振興の現状 芸術文化施設 (美術) 第13回：地域における芸術文化振興の課題 芸術文化施設 (美術) (7 矢野 宏光・4 前田 克治・3 土井原 崇浩/2回) (共同) 第14回：グループディスカッション 第15回：本授業の総括 (まとめプレゼンテーションの実施)</p>	<p>オムニバス・共同 (一部)</p>
---------------	-------------------	---	--------------------------

<p>地域文化振興特論Ⅱ</p>	<p>地域文化振興特論Ⅱでは、文化振興などの課題を解決することができる高度な専門職業人として求められるスポーツ・芸術を軸とした地域文化振興に関する実践力の養成を目標としている。この授業では、地方自治体職員、地域スポーツハブを構想しているパートナー、文化芸術施設スタッフ、公益財団法人等の協働する外部機関と連携を図り、専門職業人が活動する現場に足を運び、その環境や利用者が抱える課題について、データを収集し、分析をはかり、課題解決に向けた提案を検討する。地域に暮らす生活者が実際に抱えている課題について実践的に学習することで、地域文化共創に対する実践力を高めることが期待できる。</p> <p>(オムニバス方式 / 全15回)</p> <p>(7 矢野 宏光・4 前田 克治・3 土井原 崇浩・22 大崎 優/1回) (共同)</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>(7 矢野 宏光/3回)</p> <p>第2回：スポーツ行政を実践的に学ぶ(1) 子どものスポーツ</p> <p>第3回：スポーツ行政を実践的に学ぶ(2) 高齢者のスポーツ</p> <p>第4回：スポーツ行政を実践的に学ぶ(3) 地域のスポーツ</p> <p>(22 大崎 優・26 武市 光徳/3回) (共同)</p> <p>第5回：地域スポーツを実践的に学ぶ(1) スポーツ現場 (データ収集)</p> <p>第6回：地域スポーツを実践的に学ぶ(2) スポーツ現場 (データ分析)</p> <p>第7回：地域スポーツを実践的に学ぶ(3) スポーツ現場 (課題検討)</p> <p>(4 前田 克治・28 濱口 友章/3回) (共同)</p> <p>第8回：地域の芸術文化振興を実践的に学ぶ(音楽) (1) 芸術文化施設 (音楽) (データ収集)</p> <p>第9回：地域の芸術文化振興を実践的に学ぶ(音楽) (2) 芸術文化施設 (音楽) (データ分析)</p> <p>第10回：地域の芸術文化振興を実践的に学ぶ(音楽) (3) 芸術文化施設 (音楽) (課題検討)</p> <p>(3 土井原 崇浩・29 筒井 秀一/3回) (共同)</p> <p>第11回：地域の芸術文化振興を実践的に学ぶ(美術) (1) 芸術文化施設 (美術) (データ収集)</p> <p>第12回：地域の芸術文化振興を実践的に学ぶ(美術) (2) 芸術文化施設 (美術) (データ分析)</p> <p>第13回：地域の芸術文化振興を実践的に学ぶ(美術) (3) 芸術文化施設 (美術) (課題検討)</p> <p>(7 矢野 宏光・4 前田 克治・3 土井原 崇浩/2回) (共同)</p> <p>第14回：グループディスカッション</p> <p>第15回：本授業の総括 (まとめプレゼンテーションの実施)</p>	<p>オムニバス・共同 (一部)</p>
------------------	--	--------------------------

<p>地域社会学特論 I</p>	<p>現在の地域社会（高知県）においては、少子高齢化、労働力減少等に起因して、様々な課題が顕在化してきており、その課題は、スポーツ・芸術を取り巻く領域にも大きな影響を与えている。また、多様化社会において、異文化理解やジェンダー論等は、スポーツ・芸術分野にとっても、もはや避けられないテーマとなってきた。</p> <p>本講義では、スポーツ・芸術を取り巻く周辺領域を中心に最新の研究にも触れながら、多角的に地域課題を分析できる能力を身に付ける。</p> <p>地域社会学特論 I では、「人口動態（世代間格差）」「地域における労働問題と余暇」「地域における政策決定」「ジェンダー」を主なキーワードに地域社会の課題を分析する。</p> <p>（オムニバス方式 / 全15回） （6 森田 美佐・10 磯部 香/3回）（共同）</p> <p>第1回：オリエンテーション 第14・15回：これまでの授業を踏まえた受講生のプレゼンテーション （6 森田 美佐/6回）</p> <p>第2回：少子高齢化、ライフコースの多様化、地域社会への影響 第3回：地域社会において男女共同参画はどこまで進んだのか 第4回：地域社会において男女共同参画を阻むものは何か 第5回：ジェンダー平等を地域の行政や社会の活動に生かそうとする自治体の例を検討し、その可能性と他の地域社会で生かすための課題を考える</p> <p>第10回：地域社会におけるジェンダー平等の実現に向けて活動する高知県の団体の方々の報告を通して、我々が持続可能なジェンダー平等を地域社会でどのように担い実践できるかを考える</p> <p>第11回：メディアにおいて、高知県の地域社会の現状と課題を見つめる方々の報告と質疑応答を通して、豊かな社会をつくるために、地域社会ではどのような発信ができるのか考える （10 磯部 香/6回）</p> <p>第6回：日本において、ケアすることとケアされることの問題はどのように扱われてきたのか、また、諸外国におけるケアの課題と日本のそれはどのように異なり、地域社会では何を課題として扱うべきか 第7回：外国をルーツとする人々は地域社会にどのように暮らしているのか、またその中でいかなる生活問題が生じているか 第8回：性の多様性について、地域社会ではどのような理解がなされているのか</p> <p>第9回：異文化を理解した上で、地域の活動につなげようとする地域の組織や団体の事例を検討し、その可能性と課題を考える</p> <p>第12回：地域社会における生の多様性の現状と課題 第13回：ケアの権利が担保された地域社会実現への課題</p>	<p>オムニバス・共同 （一部）</p>
------------------	--	---------------------------

<p>地域社会学特論Ⅱ</p>	<p>現在の地域社会（高知県）においては、少子高齢化、労働力減少等に起因して、様々な課題が顕在化してきており、その課題は、スポーツ・芸術を取り巻く領域にも大きな影響を与えている。また、多様化社会において、経済、デジタル技術、法律等の知識なくして、これからのスポーツ・芸術活動を行っていくことは、もはや困難となりつつある。</p> <p>本講義では、スポーツ・芸術を取り巻く周辺領域を中心に最新の研究にも触れながら、多角的に地域課題を分析できる能力を身に付ける。</p> <p>地域社会学特論Ⅱでは、「地域社会と経済・社会福祉」「デジタル・デバインド」「地域社会における法と人権」を主なキーワードに地域社会の課題を分析する。</p> <p>（オムニバス方式 / 全15回） （21 山崎 聡・23 佐竹 泰和・24 小西 葉子/3回）（共同）</p> <p>第1回：オリエンテーション 第14・15回：これまでの授業を踏まえた受講生のプレゼンテーション （21 山崎 聡/4回）</p> <p>第2回：経済や社会福祉に関する地域社会の現状と課題 第3回：地域社会と経済・社会福祉の今後と、それが人々のウェルビーイングに与える影響 第4回：地域社会において経済格差・福祉の格差をどう補償するか 第5回：経済を通して地域活動の活性化につなげようとする団体及び組織からの報告と質疑応答を通して、地域の人々の暮らし・生活の豊かさについて考察 （23 佐竹 泰和/4回）</p> <p>第6回：中山間地域における地域社会の現状と課題 第7回：地域社会におけるデジタル・デバインドの現状と課題及びそれが地域で暮らす人々の生活の質に与える影響 第8回：地域社会におけるデジタル・デバインドの克服・地理的空間を超えた地域文化創造の可能性と課題 第9回：デジタル技術の活用を通して地域活動の活性化につなげようとする団体及び組織からの報告と質疑応答を通して、地域の人々の暮らし・生活の豊かさについて考察 （24 小西 葉子/4回）</p> <p>第10回：法と人権に関する基礎知識を解説し、地域社会とのつながりを理解する 第11回：地域社会において基本的人権は守られているかを問い、地域で暮らす人々の実生活に法律が与える影響について解説 第12回：地域社会と結びついたスポーツや芸術に関する実際の訴訟について 第13回：地域社会を生きる人々の人権を守る法律の今後の課題について</p>	<p>オムニバス・共同 （一部）</p>
-----------------	---	---------------------------

<p>地域社会学特論Ⅲ</p>	<p>現在の地域社会（高知県）においては、価値観の多様化等を背景に、様々な課題が顕在化してきており、その課題は、スポーツ・芸術を取り巻く領域にも大きな影響を与えている。また、多様化社会において、ハラスメント、生きづらさの問題等は、これからのスポーツ・芸術活動にとっても、もはや避けられないテーマとなっている。</p> <p>本講義では、スポーツ・芸術を取り巻く周辺領域を中心に最新の研究にも触れながら、多角的に地域課題を知り、それらを社会学の視点で理論的に分析できる能力を身に付ける。</p> <p>地域社会学特論Ⅲでは、「生活におけるジェンダー統計」「地域社会を生きる子どもたちを取り巻く現象」「スポーツ競技者の権利保障・人権問題」を主なキーワードに地域社会の課題を分析する。</p> <p>（オムニバス方式 / 全15回） （6 森田 美佐・10 磯部 香・17 中村哲也/3回）（共同） 第1回：オリエンテーション 第14・15回：これまでの授業を踏まえた受講生のプレゼンテーション（6 森田 美佐/4回） 第2回：ジェンダー統計からみる地域社会の生活課題 第3回：生涯を通じた男女の健康とリプロダクティブヘルスライツをどう獲得するか 第4回：性暴力は「女だけ」の問題か—性暴力を社会学から考える 第5回：パワハラはなくなったのか—ハラスメントの社会的分析（10磯部 香/4回） 第6回：なぜ相対的貧困は見えないのか①—子どもの貧困 第7回：なぜ相対的貧困は見えないのか②—生理的貧困 第8回：グローバルの視点とは①—日本社会の生きづらさ・不寛容さを考える 第9回：グローバルの視点とは②—地域の中の多文化共生と課題（17 中村 哲也/4回） 第10回：スポーツ基本法とスポーツ権保障 第11回：スポーツ界の体罰・暴力問題 第12回：スポーツ界のジェンダー・性的マイノリティ問題 第13回：家庭の経済格差の子どものスポーツ権保障</p>	<p>オムニバス・共同 （一部）</p>
<p>地域DX実践特論</p>	<p>地域DX実践特論では、地域が抱える様々な課題をデジタル技術を用いて解決するための知識・技能を修得する。現在の高度情報化社会においてはデジタル技術はさまざまな社会課題の解決に貢献しているが、実社会における課題をデジタル技術を用いて効率的・効果的に解決するためには、各種デジタル技術の特徴や基本的な動作原理、導入・運用上の留意点等の知識が求められる。本授業は、情報系ではない受講生が各種デジタル技術に関する知見を深められるよう、デジタル技術の動作原理を概説した上で、「IoT」「VR/MR/AR」「AI」などの実社会でも活用されているテクノロジーについて多面的に解説・議論する。そして、各自が地域課題をDXで解決する方法を考える活動を通して、課題解決のためにデジタル技術を応用するための知見を深める。</p>	
<p>地域統計分析特論</p>	<p>地域統計分析特論では、統計データ等に基づいたエビデンスベースの研究に不可欠なデータ分析手法やその応用技術を修得する。人工知能（AI）・IoT・ビッグデータ等の技術の急激な進化により、あらゆるものの情報が電子化され、結びつき、相互に影響を及ぼし合う未来社会の到来が見込まれている。デジタル社会においては、データリテラシーは、情報分野だけでなく、工学、化学、薬学、芸術などの全ての分野に共通して必要となってくる。本講義では、専門分野の研究に必要なデータの収集・整理・分析方法を統計学をメインとして身につける。</p>	

<p>専攻ゼミナール科目</p>	<p>スポーツ・芸術文化共創ゼミナールⅠ</p>	<p>専攻ゼミナール科目である「スポーツ・芸術文化共創ゼミナール」は、2年間を通して①事例研究（文献調査）、②事例研究（課題探求）、③プロジェクト企画・実施、④プロジェクト実施結果の考察までを行う課題解決型授業である。スポーツ・芸術、及び社会学や文化振興をフィールドとする多様な専門分野の教員が参加し、複合的視点により授業を行う。そして、教員や他分野を含む受講生との議論を通して、スポーツ・芸術文化共創への学術的アプローチ法や課題解決に向けた具体策の提案について学んでいく。</p> <p>「ゼミナールⅠ」では、まず、①事例研究（文献調査）を行い、文献のレポートとディスカッションを通して、受講生が修士課程において、自身の研究や活動に対するものの見方・考え方を広げ、スポーツ・芸術文化共創の担い手となるための学術的な力を身につけることを目標とする。</p> <p>各教員は以下の専門分野の観点から指導を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 小原 浄二) 声楽 (2) 高橋 美樹) 音楽学 (3) 土井原 崇浩) 洋画 (4) 前田 克治) 作曲、音楽理論 (5) 宮本 隆信) 体育科学教育、スポーツ指導論 (6) 森田 美佐) 社会科学（ジェンダー研究） (7) 矢野 宏光) スポーツ心理学、運動心理学 (8) 吉岡 一洋) デザイン (9) 阿部 鉄太郎) 彫刻 (10) 磯部 香) 社会科学（多文化共生） (11) 大山 宮和瑚（美和子）) ピアノ (12) 梶原 彰人) 管楽器 (13) 金 奎道) 音楽教育 (14) 野角 孝一) 日本画 (15) 松島 朝秀) 文化財保存科学 (16) 幸 篤武) 体力科学、健康科学 (17) 中村 哲也) スポーツ社会学 (18) 相良 宗臣) 統計分析 (19) 福谷 遼太) 情報科学 (20) 神門 大輔) スポーツ運動学、発生運動学 	
	<p>スポーツ・芸術文化共創ゼミナールⅡ</p>	<p>専攻ゼミナール科目である「スポーツ・芸術文化共創ゼミナール」は、2年間を通して①事例研究（文献調査）、②事例研究（課題探求）、③プロジェクト企画・実施、④プロジェクト実施結果の考察までを行う課題解決型授業である。スポーツ・芸術、及び社会学や文化振興をフィールドとする多様な専門分野の教員が参加し、複合的視点により授業を行う。そして、教員や他分野を含む受講生との議論を通して、スポーツ・芸術文化共創への学術的アプローチ法や課題解決に向けた具体策の提案について学んでいく。</p> <p>「ゼミナールⅡ」では、「ゼミナールⅠ」で行った文献調査を基盤としつつ、②事例研究（課題探求）を行い、受講生が修士課程において、何を目的とし、どのような方法でスポーツ・芸術文化共創を行っていくか、課題を明確にさせることを目標とする。</p> <p>各教員は以下の専門分野の観点から指導を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 小原 浄二) 声楽 (2) 高橋 美樹) 音楽学 (3) 土井原 崇浩) 洋画 (4) 前田 克治) 作曲、音楽理論 (5) 宮本 隆信) 体育科学教育、スポーツ指導論 (6) 森田 美佐) 社会科学（ジェンダー研究） (7) 矢野 宏光) スポーツ心理学、運動心理学 (8) 吉岡 一洋) デザイン (9) 阿部 鉄太郎) 彫刻 (10) 磯部 香) 社会科学（多文化共生） (11) 大山 宮和瑚（美和子）) ピアノ (12) 梶原 彰人) 管楽器 (13) 金 奎道) 音楽教育 (14) 野角 孝一) 日本画 (15) 松島 朝秀) 文化財保存科学 (16) 幸 篤武) 体力科学、健康科学 (17) 中村 哲也) スポーツ社会学 (18) 相良 宗臣) 統計分析 (19) 福谷 遼太) 情報科学 (20) 神門 大輔) スポーツ運動学、発生運動学 	

<p>スポーツ・芸術文化共創ゼミナールⅢ</p>	<p>専攻ゼミナール科目である「スポーツ・芸術文化共創ゼミナール」は、2年間を通して①事例研究（文献調査）、②事例研究（課題探求）、③プロジェクト企画・実施、④プロジェクト実施結果の考察までを行う課題解決型授業である。スポーツ・芸術、及び社会学や文化振興をフィールドとする多様な専門分野の教員が参加し、複合的視点により授業を行う。そして、教員や他分野を含む受講生との議論を通して、スポーツ・芸術文化共創への学術的アプローチ法や課題解決に向けた具体策の提案について学んでいく。</p> <p>「ゼミナールⅢ」では、「ゼミナールⅠ」「ゼミナールⅡ」で行った事例研究（文献調査と課題探求）の実践的応用を目指し、③プロジェクト企画・実施を行い、受講生が修士課程において、実際にスポーツ・芸術文化共創を行っていく上での思考力やスキルを身に付けることを目標とする。</p> <p>各教員は以下の専門分野の観点から指導を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 小原 浄二) 声楽 (2) 高橋 美樹) 音楽学 (3) 土井原 崇浩) 洋画 (4) 前田 克治) 作曲、音楽理論 (5) 宮本 隆信) 体育科学教育、スポーツ指導論 (6) 森田 美佐) 社会科学（ジェンダー研究） (7) 矢野 宏光) スポーツ心理学、運動心理学 (8) 吉岡 一洋) デザイン (9) 阿部 鉄太郎) 彫刻 (10) 磯部 香) 社会科学（多文化共生） (11) 大山 宮和瑚（美和子）) ピアノ (12) 梶原 彰人) 管楽器 (13) 金 奎道) 音楽教育 (14) 野角 孝一) 日本画 (15) 松島 朝秀) 文化財保存科学 (16) 幸 篤武) 体力科学、健康科学 (17) 中村 哲也) スポーツ社会学 (18) 相良 宗臣) 統計分析 (19) 福谷 遼太) 情報科学 (20) 神門 大輔) スポーツ運動学、発生運動学 	
<p>スポーツ・芸術文化共創ゼミナールⅣ</p>	<p>専攻ゼミナール科目である「スポーツ・芸術文化共創ゼミナール」は、2年間を通して①事例研究（文献調査）、②事例研究（課題探求）、③プロジェクト企画・実施、④プロジェクト実施結果の考察までを行う課題解決型授業である。スポーツ・芸術、及び社会学や文化振興をフィールドとする多様な専門分野の教員が参加し、複合的視点により授業を行う。そして、教員や他分野を含む受講生との議論を通して、スポーツ・芸術文化共創への学術的アプローチ法や課題解決に向けた具体策の提案について学んでいく。</p> <p>「ゼミナールⅣ」では、「ゼミナールⅢ」で企画・実施したプロジェクトについて、④実施結果の考察を行い、受講生が修士課程において、データや客観的指標に基づきスポーツ・芸術文化共創プロジェクトの結果を考察できることを目標とする。</p> <p>各教員は以下の専門分野の観点から指導を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 小原 浄二) 声楽 (2) 高橋 美樹) 音楽学 (3) 土井原 崇浩) 洋画 (4) 前田 克治) 作曲、音楽理論 (5) 宮本 隆信) 体育科学教育、スポーツ指導論 (6) 森田 美佐) 社会科学（ジェンダー研究） (7) 矢野 宏光) スポーツ心理学、運動心理学 (8) 吉岡 一洋) デザイン (9) 阿部 鉄太郎) 彫刻 (10) 磯部 香) 社会科学（多文化共生） (11) 大山 宮和瑚（美和子）) ピアノ (12) 梶原 彰人) 管楽器 (13) 金 奎道) 音楽教育 (14) 野角 孝一) 日本画 (15) 松島 朝秀) 文化財保存科学 (16) 幸 篤武) 体力科学、健康科学 (17) 中村 哲也) スポーツ社会学 (18) 相良 宗臣) 統計分析 (19) 福谷 遼太) 情報科学 (20) 神門 大輔) スポーツ運動学、発生運動学 	

専攻選択科目	スポーツ・健康分野	地域指導者特論（体育）	地域指導者特論（体育）では、地域における子どもから高齢者までの地域に在住している対象者によって求められるニーズや課題に対して、それぞれの対象者に合わせた指導について学ぶ。変化する地域の社会状況の中で、生涯スポーツから競技スポーツまで幅広いスポーツ実践現場で指導者として活躍できるための理論や方法論について学習する。授業では、ティーチングとコーチングの差異を踏まえて、コーチングについての理解を深め、発達や求められているニーズにあわせたスポーツ指導の在り方について、ディスカッションなども積極的に取り入れ、学習を進めていく。	
		スポーツ指導者特論Ⅰ	スポーツ指導者特論Ⅰでは、体育・スポーツ指導者の資格や心構えや競技種別や対象者別にあわせた指導を行う上で必要となる競技別育成指針、対象者にあわせた指導法、スポーツ倫理などの指導者に必要な専門知識を学ぶ。変化する社会環境の中で、子どもから高齢者、ジェンダーを含めたすべての人が豊かなスポーツライフを実現するため、生涯スポーツから競技スポーツまでを範囲とした幅広いスポーツ実践現場の指導者として活躍できるようになるための専門性を養うことを目的とした解説や討議を行う。	
		スポーツ指導者特論Ⅱ	スポーツ指導者特論Ⅱでは、スポーツ指導者特論Ⅰにおいて修得したスポーツ指導者としての専門知識を基に、地域のコミュニティやスポーツ集団、組織、望ましい指導と評価、スポーツ指導現場の安全管理など、体育・スポーツ指導者として、地域におけるスポーツ組織・管理について学修していく。対象者が豊かなスポーツライフの実現にむけて、目的に応じた生涯スポーツおよび競技スポーツなどの幅広いスポーツ実践現場の指導者として活躍できるための知識・考え方を理解し、対応できる資質・能力を育成するための実践的な学修を行う。	
		スポーツ指導者特論演習	スポーツ指導者特論演習では、これまでのスポーツ指導者特論Ⅰ、Ⅱを発展させ、スポーツ指導について、各年代のスポーツ指導を事例にしなが、各自が課題を提案し、検討しながらスポーツ指導について探求していく。さらに受講生が興味関心のある研究課題について、関連する先行研究のレビューによって理論的背景や調査・実験手続きを明確にし、実験計画を立てる。さらに、調査・実験の実施、得られたデータのまとめ方、考察の方法を学びながら、これらの成果を総括して発表する。一連の流れの中でスポーツ指導者についての調査・実験方法を学修する。	
		スポーツ心理学特論Ⅰ	運動・スポーツ心理学の代表的な理論とモデル、臨床スポーツ場面で用いられる実践的な方法論やスキルについて先行研究を提示しながら講義する。授業では、スポーツ実施者（一般人）、スポーツアスリート、子どもや高齢者、個人と集団など、様々な対象者に対するアプローチの方法を学修する。さらに、スポーツ心理学の理論を実際のスポーツ場面や地域のスポーツ指導に適用することができる能力を養成する。	
		スポーツ心理学特論Ⅱ	本授業では、スポーツ心理学特論Ⅰにおいて修得したスポーツ心理学の専門知識をベースとして、それを様々なスポーツ場面及び対象者に応用することで課題解決を図ることを目標としている。そのためには、児童・生徒、スポーツ実施者（一般人）、スポーツアスリート、スポーツ集団、など多様な対象者に対し、その属性の特徴を明確に理解する必要がある。また、スポーツ現場で起こる様々な事例を想定しながら、スポーツ心理学の専門知識を指導場面にどのように適用するかも検討する必要もある。授業においては、これらの求められる能力を養成するため実践的な学修を進める。	
		スポーツ心理学特論演習	本授業では、スポーツ心理学特論Ⅰ、Ⅱでの理論や実践を発展させ、受講生が興味関心のあるスポーツ心理学の研究課題について、関連する先行研究のレビューによって理論的背景や調査・実験手続きを明確にし、実験計画を立てる。さらに、調査・実験の実施、得られたデータのまとめ方、考察の方法を学ぶ。さらに、これらの成果を総括して発表する。一連の流れの中でスポーツ心理学の調査・実験方法を学修する。	

健康スポーツ運動学特論 I	本講義は地域スポーツ文化に根差したスポーツ運動学および発生論的運動学の分析方法について取り扱う。自然科学的運動分析と人間学的運動分析の違いを明らかにし、運動学の独自性について考える。本講義ではスポーツ運動学や発生論的運動学の専門用語や分析方法について解説していく。運動やスポーツの現場では運動がどのようにしてできるようになるのか、またどのようにして人をできるようにさせるのかということが問題になる。運動を身体で理解すること、人に理解させることを専門用語の理解を通して学んでいく。	
健康スポーツ運動学特論 II	本講義は地域スポーツ文化に根差した発生論的運動分析について具体的例証を用いて解説する。スポーツや運動の指導現場では「わかっていてもうまく動けない」や「どう教えたらよいかわからない」など様々な課題に直面する。これらの課題を発生運動学の立場から考察し、スポーツや運動に関する理解を深め、指導する際の考え方を学ぶ。運動学の分析方法について具体的例証を用いて解説を行っていく。スポーツや運動をする際や指導をする際など、指導現場で起こる事例にあてはめながら解説していく。	
健康スポーツ運動学特論演習	本講義は地域スポーツ文化に根差したスポーツ運動学や発生運動学に関する文献や研究論文等を読み進めながら、研究の方法について確認していく。それぞれの専門種目などの事例にあてはめながら分析方法について確認する。それぞれの事例を用いて発生論的運動学の立場から考察する。また、専門外の競技や種目の事例についても検討することで発生論的運動学の分析方法についてより理解を深める。	
体力医科学特論 I	筋力や全身持久力、免疫などからなる体力は生活習慣病の予防や介護予防を考える上で重要な要素である。講義は体力医科学の成り立ちから変遷について、体力の構成要素について、子どもや高齢者における体力評価の意義などについて学ぶとともに、体力と関連した現実の地域健康課題に対するアプローチ方法についての着想を得ることを目指す。	
体力医科学特論 II	メタボリックシンドロームやがんなどの生活習慣病や認知症、フレイル、サルコペニアなどの老年病は現代社会において問題となっており、幼少期から高齢期までの一貫した予防が重要とされる。本授業では、「特論 I」での既習内容をふまえ、これらの諸問題についての改善の具体的方策を得るとともに、少子高齢化のフロントランナーである高知県をフィールドとした場合の実践の在り方についても議論し、「演習」へと接続する。	
体力医科学特論演習	地域に暮らす子どもや高齢者を対象とした健康増進のための運動・栄養・社会活動を用いた介入プログラムを作成するとともに介入の実践を行う。また介入効果についても多面的な評価を行い、データ解析の実際とその結果についてのプレゼンテーションを行う。そして得られた成果を基に多面的な検証を行うことで、より効果的なプログラム内容へと改善していくことを目指す。	

<p>芸術分野</p>	<p>地域指導者特論（音楽）</p>	<p>「地域指導者特論（音楽）」では、文化振興などの課題を解決できる高度な専門職業人の育成をめざし、伝統芸能および西洋の音楽文化に対する理解を深め、地域指導者の社会的役割を考える。授業はオムニバス形式で実施し、前半の5回（金）で古典芸能・伝統芸能に関する知識、研究計画の立案に必要な手法を修得させる。後半の5回（梶原）で西洋の音楽文化に対する技能をはじめ、西洋の音楽文化が地域文化として受容されていくプロセスを明らかにする。そして、最後の5回は金と梶原が合同で実施し、新たな地域活性化のためのアイデアの提案と実現可能性の検証する。 （オムニバス方式 / 全15回） （13 金 奎道/5回） 第1回：オリエンテーション及び授業計画の説明 第2回：文化芸術振興の方向性 第3回：高知県文化芸術振興ビジョン 第4回：音楽イベントの広報 第5回：ふるさとの伝承 （12 梶原 彰人/5回） 第6回：データの分析を通して感得する演奏基礎教材開発 第7回：地域のクラブ指導者育成（吹奏楽を含む管楽器指導を中心に） 第8回：文化芸術活動における地域の持続可能な環境整備 第9回：音楽分野における地域指導者 第10回：地域文化芸術の創造・発展・継承と豊かな文化芸術教育の充実 （13 金 奎道・12 梶原 彰人/5回）（共同） 第11回：教育社会学からのアプローチ 第12回：研究プロジェクトの企画 第13・14回：プログラムの個別評価 第15回：統合（共創の理念を理解し、芸術文化の創造と発信を通して社会へと実装することができる環境構成について考える。）</p>	<p>オムニバス・共同 （一部）</p>
-------------	--------------------	---	---------------------------

<p>地域指導者特論（美術）</p>	<p>地域指導者（美術）として社会で活躍するためには、地域・教育課題をソーシャル・エンゲイジド・アート（SEA）の視座から分析・考察し、地域の中で実践的に取り組み続けることが重要である。本授業では、高知県広域（中心部・郊外・中山間）の地域資源と地域課題について学び、高知県内外でのSEAの事例から地域指導者（美術）としての社会的役割を理解する。また、高知県内で実践展開されている「地域課題解決型アートイベント」を調査・分析することで、地域指導者（美術）と活動地域との具体的な共働事例に理解を深め、今後の研究計画に役立てる。</p> <p>（オムニバス方式 / 全15回） （14 野角 孝一/6回）</p> <p>第1回：地域課題に対する地域指導者（美術）の役割について—地域芸術と実践事例— 第4回：高知県の中心地域における地域資源（伝統文化・自然環境）と地域課題について 第5回：高知県の郊外地域における地域資源（伝統文化・自然環境）と地域課題について 第7回：高知県におけるソーシャル・エンゲイジド・アート（SEA）を考える 第9回：地域課題解決型アートイベントのフィールドワーク① 絵金蔵（事前指導） 第10回：地域課題解決型アートイベントのフィールドワーク② 絵金蔵（実地調査） （9 阿部 鉄太郎/6回） 第2回：地域課題に対する地域指導者（美術）の役割について—地域教育と美術の関係— 第3回：「高知県文化芸術振興ビジョン」についての考察 第6回：高知県の中山間地域における地域資源（伝統文化・自然環境）と地域課題について 第8回：中四国におけるソーシャル・エンゲイジド・アート（SEA）を考える 第11回：地域課題解決型アートイベントのフィールドワーク③ 須崎まちかどギャラリー（事前指導） 第12回：地域課題解決型アートイベントのフィールドワーク④ 須崎まちかどギャラリー（実地調査） （14 野角 孝一・9 阿部 鉄太郎/3回）（共同） 第13回：フィールドワークでの調査内容の分析 第14回：分析内容のプレゼンテーション準備 第15回：プレゼンテーション</p>	<p>オムニバス・共同 （一部）</p>
<p>音楽学特論 I</p>	<p>世界の諸民族の音楽及びポピュラー音楽が成立した過程や変遷について、音楽学的アプローチを通して分析する。音楽が人々にとってどのような意味をもつのか、社会構造と音楽の関係、自国の音楽と近隣諸国の音楽との関係、伝承の形態、非西洋社会における西洋音楽の受容、マスメディアの発達などに着目する。さらに、地域社会における音楽振興の研究テーマを設定し、地域の音楽史を紐解く方法を学ぶ。</p>	
<p>音楽学特論 II</p>	<p>世界の諸民族の音楽及びポピュラー音楽を対象とした各自の研究テーマを設定し、先行研究を整理する。各自の研究テーマにそって、音楽の構造分析、楽曲分析の方法などを学ぶ。その後、文献、楽譜、音響資料などを調査し、口頭発表を行う。特に、日本の伝統音楽、ポピュラー音楽、音楽産業、文化政策に焦点を当て、地域社会における課題とその解決方法を追究する。</p>	
<p>音楽学特論演習</p>	<p>ポピュラー音楽や音響メディアを対象とした各自の研究テーマを設定し、文献、楽譜、音響資料などを調査分析した上で、研究成果をまとめる。CD売り上げ、ダウンロード数、ヒットチャート、コンサート動員数など統計データを活用した研究の可能性を探る。また、商業・広告音楽、音楽イベント、演奏・作品発表の視点から、地域音楽振興の課題を探る。その上で、地域社会における音楽振興の課題解決を目指し、統計データを根拠とした提案書を作成する。</p>	

音楽教育実践特論 I	本講義では、ジョン・デューイ『経験としての芸術』における芸術論を再考し、この芸術論における経験のあり方とその意義を明らかにする。そして、芸術論から今日の芸術教育を再考するため、理論的説明を通して、芸術教育哲学および音楽教育の原理を導出する。これらを通して、音楽教育の根底にある芸術論（生成の原理）の理解を深めていく。	
音楽教育実践特論 II	本講義では、原始時代の音楽教育、古代ギリシャの音楽教育、古代ローマ時代の音楽教育、中世の音楽教育、ルネサンス期の音楽教育、近代の音楽教育、19世紀アメリカにおける学校音楽教育の成立過程など、過去の音楽教育の歴史を通してこれからの未来の音楽教育を考える。これらの理解を通して、地域社会における音楽教育の実践を批判的に考察する。	
音楽教育実践特論演習	本講義では、地域社会における音楽アウトリーチ活動の可能性を探るため、創作および鑑賞活動の実践について映像を交えて紹介する。そして、対象者や地域の実像を踏まえた指導のポイントなどを一緒に考えながらアウトリーチ活動を企画・実践する。また、西洋音楽だけでなく、伝統音楽をも取り入れた多様な音素材や表現方法を扱うことにより、音や音楽の見方・考え方を広げていくことを目的とする。	
管楽器特論 I	個人対応を基本とし、履修者の対話と実践によって授業をすすめる。 履修者任意の管楽器における演奏表現について、バロック時代もしくは古典派の独奏曲を用いた演奏実践を通して研究する。管楽器発展の歴史や時代背景、楽曲分析に基づいた表現の可能性について言及しつつ、姿勢や呼吸、体の使い方などフィジカル面や、それらを体系的に会得するためのエチュードを用いたアプローチも交えることで、表現者と指導者の相互関係について理解を深め、地域の指導者としての演奏力や指導力を身につける。	
管楽器特論 II	個人対応を基本とし、履修者の対話と実践によって授業をすすめる。 履修者任意の管楽器における演奏表現について、ロマン派の独奏曲を用いた演奏実践を通して研究する。管楽器発展の歴史や時代背景、楽曲分析に基づいた表現の可能性について言及しつつ、バロック及び古典派との表現の違いについて、特論 I との比較を通して理解を深め、地域の指導者としての演奏力や指導力を身につける。 特にフレージングについて、室内楽や管弦楽の楽曲にも触れ、表現を追及する。	
管楽器特論演習	個人対応を基本とし、履修者の対話と実践によって授業をすすめる。 本授業の最終目標は、ミニリサイタルを開催することである。 まず、履修者任意の管楽器における演奏表現について、近代もしくは現代の独奏曲を用いた演奏実践を通して研究する。読譜と楽曲分析をもとに作曲者の意図を読み込むとともに、時代背景や音楽以外の芸術との相互関係を探り、表現の可能性を追及する。 次に、ミニリサイタルを企画、開催する。選曲はもちろん、フライヤーやプログラム作成など、演奏会を開催するために必要な手順、ノウハウを、実践を通して学び、地域文化振興を行うマネジメント力を身につける。	
ピアノ特論 I	「ピアノ特論 I」では、ピアノ学習のうえで必須とされる J. S. Bach のインベンション、L. v. Beethoven のピアノソナタ、F. Chopin の練習曲を題材とし、実践を通して、その学修意義について改めて考察する。実践に先立っては、時代背景の考証や楽曲分析等を行い、これに基づく自身の音楽表現を明確化する。さらに、想定した表現を的確に演奏に繋げるための効果的なアプローチ方法について、検証する。	
ピアノ特論 II	「ピアノ特論 II」では、地域社会の文化振興等においてピアノ奏者・ピアノ指導者が担い得る役割を、事例別に紹介する。また、各事例におけるピアノ奏者の在り方や、必要となる知識・技術について考察する。さらに、「ピアノ特論 I」で学修した技術を用いた実践を通して、各事例に相応しいレパートリーを獲得する。	

ピアノ特論演習	「ピアノ特論演習」では、「ピアノ特論Ⅱ」で扱った各事例を踏まえ、さらに柔軟に対応し得るレパートリーを検討、実践する。さらに、高知における地域課題を踏まえ、ワークショップ或いはアウトリーチ公演の企画運営を実施する。実施後、その振り返りやアンケート結果から、課題解決に対する有用性の考察、次回改善点について検証を行う。	
声楽特論Ⅰ	西洋音楽の声楽曲は、バロック以前から現代に至るまで多くの作曲家によって優れた作品が生み出されてきた。この授業ではそれらの作品それぞれの様式感・解釈の理解を深め、その演奏法を講義と実際の演奏を通して学ぶ。作曲家や作詞者を取り巻く時代背景や社会を理解し、時代に即した演奏習慣に基づいて、豊かな表現で美しく歌うことについて、主にルネサンス以前からバロックにかけての世俗曲、カンタータ、オラトリオについて研究を深め、地域の指導者としての演奏力や指導力を身につける。	
声楽特論Ⅱ	西洋音楽の声楽曲は、バロック以前から現代に至るまで多くの作曲家によって優れた作品が生み出されてきた。この授業ではそれらの作品それぞれの様式感・解釈の理解を深め、その演奏法を講義と実際の演奏を通して学ぶ。作曲家や作詞者を取り巻く時代背景や社会を理解し、時代に即した演奏習慣に基づいて、豊かな表現で美しく歌うことについて、特論Ⅰでは主にルネサンス以前の音楽からバロックにかけてのカンタータ、オラトリオを中心に講義を行ったが、特論Ⅱでは古典からロマン派のドイツリート、近代のオペラについて曲の解釈と演奏法について実践を交えた講義を行い、地域の指導者としての演奏力や指導力を身につける。	
声楽特論演習	声楽特論Ⅰ・Ⅱでは作曲家や作詞者を取り巻く時代背景や社会、また時代に即した演奏習慣に学んだが、それらの知識に基づき、豊かな表現で美しく歌うことについて歌唱実践を通して学ぶ。受講生が交代で実践を行う演習形式。授業期間中に2回、演奏による研究発表会を行い、地域の指導者としての演奏力や指導力を身につける。	
作曲特論Ⅰ	本授業では、作曲、及び作曲に連なる古典的音楽理論を講義する。音楽が、メロディやハーモニーといった諸要素によって組み立てられているのは自明のことであるが、真に音楽を理解するには、まず、それらについての深い知識を有していなければならない。授業の前半においては、音楽の諸要素について様々な角度から講義を行う。さらに、後半においては、楽曲分析や創作（作編曲）を通して西洋の音楽作品の構造や思想性について理解を深めていく。	
作曲特論Ⅱ	本授業では、作曲特論Ⅰで身に付けた西洋音楽や作曲の古典的理論を背景として、さらに20世紀以降の多様な作曲技法や音楽のコンセプトについて、音楽の生まれた社会的背景と関連付けながら講義する。3部構成とし、第1部は、1945年以前と以後に分けてその時代の代表的な音楽作品について紹介する。第2部では、第1部で培った様々な音楽的アイデアや作曲システムに基づいて作品の試作を行う。第3部では、それらを統合し、地域課題や現代的視点に根差した音楽創造について、論述や作品制作（作曲）を通して可能性を探っていく。	
作曲特論演習	本授業では、地域社会への視点を踏まえつつ、「作曲特論Ⅱ」で培った多様な音楽的アプローチについての知識や作曲技法をさらに発展させ、音楽創作を行う。前半15回までは、下準備として、各自の定めたテーマに従って楽譜、音源、文献調査等を行い、創作のコンセプトを定めていく。16回目以降は、計画に沿って作曲を進め、指導教員と協議、検討を行いながら、作品を完成させる。可能であれば作品の試演も含め、相応しい形態によって発表を行う。	

洋画特論Ⅰ	<p>本授業は、学士過程段階での素描の知識と技術を発展させるため、「西洋古典インク（没食子インク）と羽根ペンによる素描研究」を行う。紙に描かれた没食子インクは600年以上消えないインクである。授業前半では、インクと羽根ペンを用いたルネサンス期の三大巨匠（レオナルド・ダ・ビンチ、ミケランジェロ、ラファエロ等）の素描における技法を検証する。授業後半では、没食子インクの種類等について具体的に学ぶ。インク製造に用いられる流酸化鉄（Ⅱ）やタンニン酸（虫こぶ）、アラビアゴム等、必要とする材料を検証する。虫こぶの種類（椀の虫こぶや栗の虫こぶ等）について比較研究する。また、羽根ペン先の形状について学び、描画における効果、テクニックを検証する。加えて、学術論文等を講読、研究し、新たな知識を獲得する。本授業の終盤ではプレゼンテーションと質疑応答を通して自身の理解度を把握し不足する知識を補い、院生が自身の研究分野に応用できるような力をつける。</p>	
洋画特論Ⅱ	<p>本授業は、特論Ⅰを踏まえた上で、羽根ペンと没食子インクを用いた実践授業を行う。ルネサンス期の三大巨匠（レオナルド・ダ・ビンチ、ミケランジェロ、ラファエロ）作品の素描模写、及び自ら選んだ題材を用いて素描を描く。授業前半では、ルネサンス時代の三巨匠から素描作品を各自が選択し、作品模写を行う。作品模写は巨匠作品の追体験となり高度なテクニックを習得できる。授業後半では、自らの素描作品を描く。素描用紙は高知の伝統文化である土佐和紙を用い、西洋文化（羽根ペン画）との融合を図る。また、地域の素材を取り入れた作品制作上の問題（和紙の特性等）によるテクニックの問題等を研究する。また、地域に落とし込んだデッサン（羽根ペン画）講習の実践について講義する。各最終授業では、作品発表をし、プレゼンテーションと質疑応答を通して理解度を把握し、不足する知識、テクニックを補い、院生が自身の研究分野に応用できるような力をつける。</p>	
洋画特論演習	<p>本授業は、特論Ⅰ・Ⅱを踏まえた上での作品制作と地域への美術テクニック普及を実践する。1学期は、西洋古典インク（没食子インク）を用いた自画像を制作し、その過程を検証する。2学期では、洋画における古典技法（ハッチング）にモダンテクニックを加えた自画像制作を行う。例えば、油絵具とアクリル絵具を併用することも可能であり、装飾性豊かな作品を目指す。加えて、1学期に習得した技術を用い、地域の美術関連施設等において美術技術普及として研究の実践を演習する。各最終授業では、作品発表、プレゼンテーションと質疑応答を通して自身の理解度、テクニック習得度を把握し不足する知識を補い、院生が自身の研究分野の向上に繋がるような力をつける。</p>	
日本画特論Ⅰ	<p>「日本画特論Ⅰ」では、文化振興などの課題を解決できる人材の育成をめざし、日本画の基礎および高知土着の文化に対する理解を深め、自ら体験することによって、その社会的役割を考える。授業は日本画の基礎となる道具や材料の知識の修得、および過去の日本画作品群より具体例を採り上げ、実践による研鑽を試みる。とりわけ材料においては明治神宮外苑聖徳記念絵画館に展示されている絵画の支持体として採用された神宮紙とその開発に関わる歴史をひも解き、現代の日本画の支持体として高知が誇る高知麻紙について俯瞰する。また、高知ゆかりの絵金の芝居絵屏風を中心とする作品に触れ、作品が地域文化として受容されていくプロセスを明らかにする。最後に展示の企画運営を通して、地域活性化のための新たな提案を検証する。</p>	
日本画特論Ⅱ	<p>「日本画特論Ⅱ」では、文化振興などの課題を解決できる人材の育成をめざし、高知土着の文化に対する理解を深め、自ら体験することによって、その社会的役割を考える。授業内容としては高知ゆかりの絵金らの芝居絵屏風を中心とする作品に触れる。博物館施設や県立美術館に赴き、目視調査や展示の方法等を学び、芝居絵屏風の活用方法について担当学芸員に解説していただく。以上を通して、芝居絵屏風における表現技法や魅力について学生自身が説明できるようになる。</p>	

日本画特論演習	<p>「日本画特論演習」では、文化振興などの課題を解決できる人材の育成をめざし、学生自身が高知土着の文化に対する理解を深め、自ら美術作品に触れることによって、その社会的役割を考える。また、指導者として自ら新しいことを仕掛けていくためには、実践する能力や課題を積極的に解決していく能力が必須となる。本授業ではそういった能力を身につけるため、ワークショップや展覧会の企画・運営を通して、これまで見過ごされてきた、あるいは埋もれた価値に新たな視点を加えることを目的としている。さらにそこで得られた知識や経験を基に、県民に文化や芸術の作品を再認識する新たな機会や場を提案する。</p>	
彫刻特論Ⅰ	<p>地域の文化芸術をリードするには、地域の人々の生活にひそむ地域・教育課題について美術の視座から分析・考察し、それらの課題を解決するために美術の専門知識や技能をいかして実践的に取り組み続けることが重要である。本授業では、美術のうち彫刻領域を軸としながら、高知県内の文化芸術施設や地域コミュニティ等において繰り上げられる、地域・教育課題解決型の作品展やワークショップの事例を分析・考察する。高知県内広域の事例分析・考察を積み重ねることで、実際に活動現場で必要となる造形知識や基礎的彫刻実践能力を明確にし、今後習得すべき彫刻領域での研究課題をみつけだす。</p>	
彫刻特論Ⅱ	<p>地域の文化芸術をリードするには、地域の人々の生活にひそむ地域・教育課題について美術の視座から分析・考察し、それらの課題を解決するために美術の専門知識や技能をいかして実践的に取り組み続けることが重要である。本授業では、「特論Ⅰ」での既習内容をふまえて、美術のうち彫刻領域を軸としながら、高知県内広域の文化芸術施設や地域コミュニティ等において実践を想定した活動（彫刻領域）の企画を複数立案し、その内容について個々に分析する。企画立案と内容分析を繰り返すことで、実際に活動現場で必要となる造形知識や応用的彫刻実践能力を明確にし、今後習得すべき彫刻領域での研究課題をみつけだす。</p>	
彫刻特論演習	<p>地域の文化芸術をリードするには、地域の人々の生活にひそむ地域・教育課題について美術の視座から分析・考察し、それらの課題を解決するために美術の専門知識や技能をいかして実践的に取り組み続けることが重要である。本授業では、「特論Ⅰ」「特論Ⅱ」での既習内容やそこで作成した企画書をふまえて、美術のうち彫刻領域を軸としながら、高知県内の文化芸術施設や地域コミュニティ等において活動（彫刻領域）を実践する。授業前半では活動に関わる彫刻素材の材料学的な研究を行い、基礎・応用・専門的実践能力を養う。授業後半では計3回の活動実践を高知県内の地域でおこない、実践後に内容を検証することで、彫刻領域での今後の研究課題を明確にする。</p>	
デザイン特論Ⅰ	<p>グラフィックデザインに関する基礎的な知識・技術を身につけていることを前提とし、写真やイラストレーション、文字組みに関する知識・技術を高次に活用する。実社会でおこる事象に対して、調査・分析・提案・遂行という観点をデザインプロセスとして意識し、制作実践を重視して研究する。地域の芸術活動に参画し、デザインという表現領域の可能性を模索し作品制作する。具体的には、展覧会の企画やそれに関連する広報媒体（ポスター、冊子体、DM、チラシ、リーフレット、フライヤー等）を制作実践する。</p>	
デザイン特論Ⅱ	<p>社会における芸術文化の役割について考え、デザイン・アートの近現代史を概観する。地域の芸術などについて調査し発表する。高知県に点在する絵金こと絵師・金蔵（1812-1861）について、フィールドワークや参与観察を中心に調査を実施する。土佐和紙や阿波藍等（伝統工芸）や文化についても学ぶ。この他、瀬戸内国際芸術祭など地域で実施される芸術祭やアーティストインレジデンス等についても調査し、地域芸術の意義や目的について、各自の研究テーマに沿って研究を進める。</p>	

デザイン特論演習	グラフィックデザイン全般に関する実践的な指導を行う。公募展や各種展覧会に向けた作品制作を行う。授業外でもポスターなどのデザインワークを行うことがある。学内外のデザイン要請にも積極的に取り組んでいく。タイポグラフィ、イラストレーション、ブックデザイン、パッケージデザイン、シルクスクリーン、サイアノタイプなど自らの専門性をより高めるような制作研究を行う。展覧会開催に向けて、アート・デザインに関する自身の制作を振り返り、デジタル技術を活用してアーカイブ化する。	
美術史特論 I	美術史特論 I は、近代以降の日本絵画に関して通史と造形要素の歴史的展開に迫る。これにより、美術史の理解にあたって時間的連続性のみならず、作品や表現といった文脈での史的展開が意識できる視点を形成する。全15回では、まず授業の前半で近代以降の日本絵画とその前後に関する概略を学ぶ。その後、線や構成、遠近法などの日本絵画にみられる表現方法が古来から近世に至り現代に続く中でどのように展開したのかを比較し、子細に理解する。その中で、造形要素の歴史的展開を学んでいくにあたっては、教員からの一方向的な教授でなく、学生が主体的に考えた仮定や教員の発言や話題提供から発想した意見を基にした対話的な議論を通して探究的に理解を深める。学生は主体的な学びの態度を養うことでその後の研究や専門的能力につながる高度な学びの基礎を身につける。	
美術史特論 II	美術史特論 II は、美術史特論 I を踏まえて地域文化課題に応えられる研究者や専門家としての高度で応用的な見識を身につける。具体的には、①制作、用具用材といった作品制作的要素との関連②寺院建築や地域といった展覧会以外の展示形態が作り出してきた価値③開国以降、西洋美術が日本絵画に与えてきた影響などについて学ぶ。対象範囲は近代以降の日本絵画とする。①では、美術史を構成する前提にある作品制作に関する和紙や絹、筆、絵具といった各要素や描法の変化を子細に比較していくことで、これまでの歴史的な文脈での学びを補完しつつ新たな視点や作品制作の背景までも検討できる態度を形成する。②では、美術作品と建築または地域（特に高知県）との関係性について考えていくことで、そもそも日本絵画は東京や京都といった美術史上のメインストリームにおける会場芸術以外にも美術作品が息づき、各地域や文化に根差した美術史が形成されているという視点を学ぶ。③では西洋絵画の寄与について以前以後で比較し、明治以降の日本画家が西洋美術をどのように観察し日本画の表現に落とし込んだかを学ぶ。	
美術史特論演習	美術史特論演習では、これまでの美術制作や美術史特論 I 及び美術史特論 II といった美術史の学びを活かして、実際に美術史および美術史を踏まえた美術理論に関連する研究実践を想定した地域文化課題に応えられる高度な知識と技術、研究企画力、調査遂行力を身につける。具体的には、授業前半において研究のテーマ設定や先行研究、文章資料の取り扱い方法を学んだ後、作品やその他関連する調査において必要な準備や調査時の注意点を理解する。授業中盤では、前半で学んだ知識と技能を駆使して美術史や美術作家その他、美術にまつわる用具・用材など各自の興味関心に沿ったテーマを、企画・推敲・決定の3段階をとおして教員と受講生全員で応答的に構成していく。さらに、後半にかけて各自が設定したテーマで実際に調査を行い、終盤でその成果を30分程度の報告にまとめ質疑を受けることで、学術的視点と研究活動の発表までを見据えた学びをより実践的に深めていく。	

文化財保存科学特論Ⅰ	<p>近年、文化の多様性を理解する重要性が高まり、文化財・博物館資料の活用が世界的に注目されてきた。保存と活用は相反する活動とされていたが、保存を科学的にとらえ、資料を良好な状態で保存するための知識を習得することで、この相反する活動が高いレベルでバランスをとることが可能に成りつつある。</p> <p>第1回、第2回の「文化財保存科学総論」は、日本の文化保護の歴史を通して保存の意義を概観し、第3回の温湿度環境、第4回の光と照明、第5回の室内空気汚染、第6回の生物被害までの講義で「文化財資料の保存環境」について理解を深める。これらの講義では基礎的な自然科学的知識が必要となる。これらをふまえた上で、現在最も懸念されている広域災害が発生した場合の対応に関して、過去に発生した東北地方太平洋沖地震や平成30年7月豪雨での文化財レスキュー活動での成果、課題を解説する。講義後半では資料の調査や修復に関して、またDX技術導入の文化財保存分野での実例を解説し、今後の適切な導入と得られる成果について地域社会における保存と活用の観点から講義する。</p>	
文化財保存科学特論Ⅱ	<p>日本の文化財は国の指定制度に基づいて保護されている。はじめに文化財の保護がどういう形で始まり、どういう形で展開してきたのか歴史的にたどりその理念と流れについて学習する。歴史的背景から保護し保存するには文化財自体の科学的調査が必要不可欠である理由を解説し、現在のDX技術がもたらす文化財保護の可能性について述べる。続いて調査に具体的に用いられている科学的手法の例を挙げその原理や手法を説明し、そのデータや画像情報の読み方、成果の意義を説明し文化財の科学的調査が社会に与える意義や地域文化への貢献を考える。</p>	
文化財保存科学特論演習	<p>文化財保存科学特論演習は、文化財保存科学特論Ⅰ、文化財保存科学特論Ⅱをすでに修めた履修生を対象に、日本国内外の文化財の調査事例とその課題点を改めて学び、主に日本国内の文化財調査の実地経験を通して演習する。また、DXを用いた文化財資料の修復や復元、展示公開における成果例および課題を学び、現代の文化財資料の科学分析技術と伝統的な文化財修復・復元技術及びデジタル記録・出力技術を融合させ、散逸・消失する可能性が生じる文化財を調査、復元し活用する総合的な技術指標を議論する。</p> <p>また、地域社会の文化的活性化へつながる継続的發展を目標として、上記の技術指標を实践すべく地域文化施設との協働事業の実施を試みる。実践的教育を経て、個人的芸術活動を支援する「経営」「管理」を学び、方法論や地域社会におけるシステム構築の専門的能力を養う。</p>	

	(研究指導)	<p>修士論文の作成を最終目標とする研究指導であり、修士課程1年目に1回～30回、修士課程2年目に31回～60回を予定している。入学時に個人面談を実施し、研究テーマや希望進路等に基づいて主指導教員と2名の副指導教員を決定する。副指導教員のうち1名は主指導教員と同分野の教員、もう1名は文化振興・地域社会分野の教員とし、さらに複数の分野・領域にわたる研究テーマを持つ院生については、3名以上の副指導教員を置く場合がある。</p> <p>上記指導体制の下で、教員の専門分野に基づき、文化振興などの地域課題の解決を目的とした研究指導を行う。1年次には、テーマに応じて研究計画の立案を行い、関係する情報の収集を行いつつ研究を進める。そして、研究課題・研究計画のブラッシュアップを重ねていき、1年間のまとめとして研究活動の成果報告を行う。2年次には、学位論文題目を決定し、1年次に得られた成果や研究全体の進捗状況を踏まえて研究を推進し、研究調査結果の分析ならびに考察までを行う。研究指導を通して、ゼミナールでの事例研究や実践との連動を図り、さらに、特論で培うスポーツ・芸術の知識・技能を結びつけながら、主指導教員や副指導教員と相談や議論を重ね、修士論文の作成を目指していく。</p> <p>各教員は以下の専門分野に基づき指導を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 小原 浄二) 声楽 (2) 高橋 美樹) 音楽学 (3) 土井原 崇浩) 洋画 (4) 前田 克治) 作曲、音楽理論 (5) 宮本 隆信) 体育科学教育、スポーツ指導論 (6) 森田 美佐) 社会科学 (ジェンダー研究) (7) 矢野 宏光) スポーツ心理学、運動心理学 (8) 吉岡 一洋) デザイン (9) 阿部 鉄太郎) 彫刻 (10) 磯部 香) 社会科学 (多文化共生) (11) 大山 宮和瑚 (美和子)) ピアノ (12) 梶原 彰人) 管楽器 (13) 金 奎道) 音楽教育 (14) 野角 孝一) 日本画 (15) 松島 朝秀) 文化財保存科学 (16) 幸 篤武) 体力科学、健康科学 (17) 中村 哲也) スポーツ社会学 (18) 相良 宗臣) 統計分析 (19) 福谷 遼太) 情報科学 (20) 神門 大輔) スポーツ運動学、発生運動学 	
--	--------	--	--